

# 服をめぐる

一人一品  
西淑

衣服の研究現場より



TAKE FREE

KCI 公益財団法人 京都服飾文化研究財団 広報誌

# I3

2019.7



# 服をめぐる 13

一人一品

イラストレーター×KCI収蔵品

西淑 p4

KCI Wunderkammer

折りたたみ式 バッスル p12

地産街道を歩く<sup>®</sup>

〔前編〕京都 金糸 p14

KCI 活動紹介

「ドレス・コード?―着る人たちのゲーム」展 p20

今日の補修室 第13回

欠損部の製作補充① p22

お知らせ p24

## 表紙の収蔵品



### ウエストコート

1790年頃  
フランス製

京都服飾文化研究財団所蔵 表紙：成田舞 撮影 上：伊藤ゆち子 撮影

本品はアイボリーの絹サテンに多色の絹糸による草花と裸婦の刺繍が施されたウエストコート。フランスではジレという。18世紀、盛装用の西欧男性服には華やかな刺繍が好まれた。とくにウエストコートの刺繍は目を引く意匠が多く、裾には本品のような人物、あるいは動物や風景といった写実的なものもみられる。本品の刺繍は、ギリシャ神話に登場する愛と美の女神、アフロディーテだろうか。蝶々に引かれていく様が愛らしい。

## 本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

## 京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「モードのジャポニスム」展、「身体の夢」展、「FUTURE BEAUTY:日本ファッションの30年」展など)や、研究誌(『DRESSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。Website <https://www.kci.or.jp/>



「COLORS ファッションと色彩」展  
森美術館(2004年) ©The Kyoto Costume Institute,  
photo by Naoya Hatakeyama

一人一品

イラストレーター × KCI 収蔵品

# 西 淑

Nishi Shuku

著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品に迫る「一人一品」。今回のゲストはイラストレーターの西淑さんです。

西さんは1983年、福岡県生まれ。音楽や美術が好きだったお父様の影響で、こどもの頃から絵を描くことが大好きだったそうです。進学先の鳥取大学教育地域科学部芸術表現コースでは彫刻を専攻。卒業後、京都にてイラストレーションの勉強をしたのち、イラストレーターとして活動を始められました。その後は東京や京都を拠点として、個展等を開きながら作品を発表。書籍、雑誌、CDジャケット、広告、雑貨など、さまざまな媒体のイラストレーションを手がけていらつしゃいます。

貼り絵やドローイング、版画など、さまざまな手法を用いて、見る人を物語の世界へ誘うような、繊細で温かみのあるイラストを描く西さん。今回、西さんはKCI収蔵品から3点選び、それぞれのイラストを描いてくださいました。



西さんが選んだ一品

## 19世紀前期のシューズ

「西さんのコメント」

ひと針、ひと針、糸の跡が見える、美しい刺繍が施された靴。  
繊細だけれどもどこか力強くも見えます。  
自分も針を刺すように、下地に塗られた色を先の尖った針のようなもので削りだしたり、細い筆で糸をなぞっていくように、刺繍の表現を再現しました。



西さんが選んだ一品

## 19世紀初期のバッグ

「西さんのコメント」

繊細な編みもので作った花、葉、蝶々、苺、などの可愛いモチーフが散りばめられていて、いつまでも眺めていられそうなゆんしさがありません。かぎ針を動かす手に想いを馳せながら、小さなパーツを切って作って、カラーージュしました。200年以上前の仕事の美しさを自分の表現で写しとるような想いで作品を作りました。



## 西さんが選んだ一品



### シューズ

1820—30年代 フランス？  
京都服飾文化研究財団所蔵、成田舞撮影

茶色い絹サテンに草花柄を多色の絹糸で刺繍。  
19世紀初頭から1830年代にかけてフラット・  
シューズが流行し、刺繍やプリントは彩りを添  
える装飾として好まれた。



### バッグ

1810年代 フランス？  
京都服飾文化研究財団所蔵、成田舞撮影

白い絹サテンに多色の絹糸で花かごの刺繍を施  
した女性用のバッグ。当時のものは小型で紐付  
きが多い。表面と裏面では花かごの意匠が異な  
り、縁には花や蝶を模した繊細な装飾がつくな  
ど凝った作りになっている。



### デイ・ドレス

1866年頃 製作国不詳  
京都服飾文化研究財団所蔵、福永一夫撮影

白い綿オーガンジーに青い小花柄をプリントし  
たドレス。軽やかな素材と広がったスカートは  
1860年代半ばのドレスの典型。クリノリンと  
呼ばれる一種のベチコートを着着し、スカート  
を大きく膨らませた。



西さんが選んだ一品

## 19世紀中期のデイ・ドレス

「西さんのコメント」

むこうが透けてみえるほどの薄い生地には、可憐な花が  
あしらわれているとても繊細なドレス。  
どんな人が着ていたのだろうと思いを巡らせました。  
生地の繊細な雰囲気やなんとか絵に表せたらと思ひ、  
薄い紙を切り貼りして描きました。

nishishuku



## 折りたたみ式バスル

素材：綿、銅  
 原産地：西欧  
 製作年：1870-80年代

19世紀の西欧ほど女性服のシルエットが目まぐるしく変化した時代はない。なかでも1870～80年代にかけて流行したスタイルはなかなか奇妙で、バスルという下着を用いてスカートの後ろを大きく膨らませた。バスルの形は大小さまざまあったが、さぞ動きの邪魔になったことだろう。そして本品のように下に長くなったものは椅子にすら座れないではないか。しかし、提灯状に畳めるように設計することで難なく問題をクリアした。流行は簡単には手放せない。

(筒井)



『La mode illustrée』誌 (1886年) より  
 京都服飾文化研究財団所蔵



バスル (1870～80年代)の着装図/京都服飾文化研究財団所蔵/畠山崇撮影



左図のバスルをもとに製作したレプリカを着装して

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫——そこはまさに「驚異の部屋」。

地産街道を行く 13  
KCIの収蔵品にみられる  
技法や素材、米歴を手がかりに、  
各地を訪れます。

# 「前編」 京都 金糸

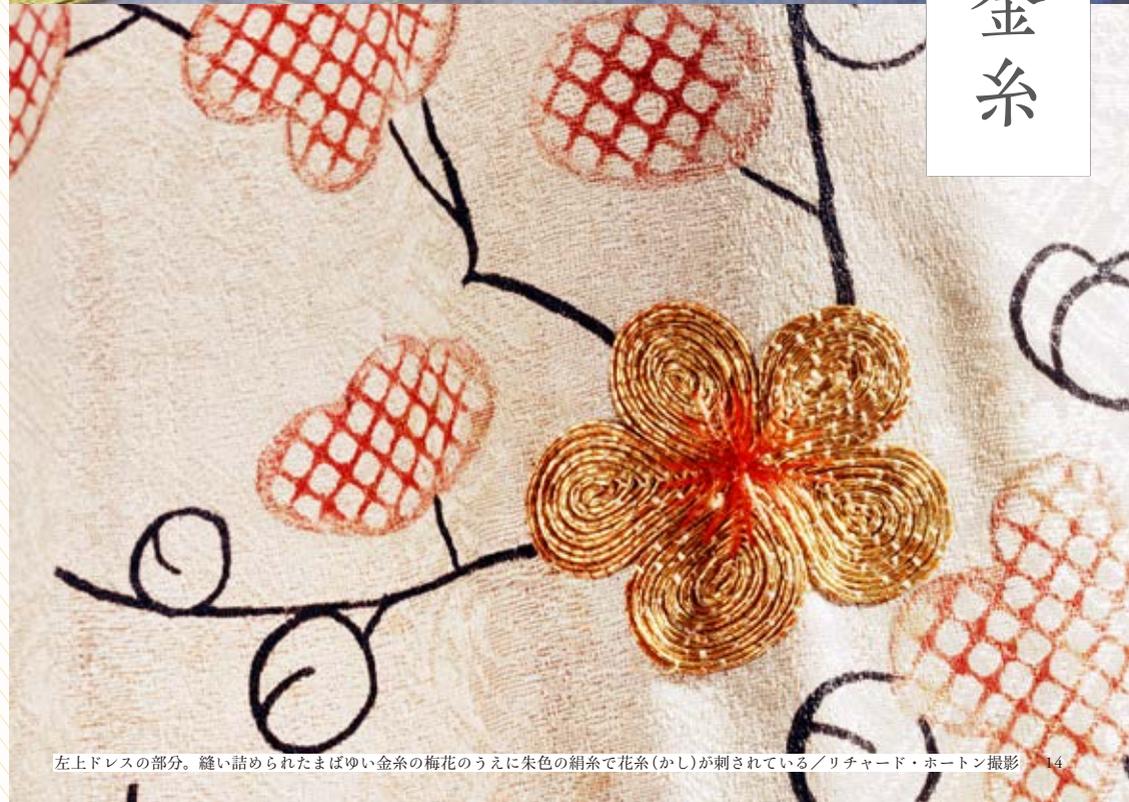


## 今回の手がかりとなる収蔵品

### ドレス

1870年代半ば  
ブランド：ターナー  
レーベル：MISSSES TURNER COURT DRESS  
MAKERS 151. SLOANE STREET LONDON  
京都服飾文化研究財団所蔵  
リチャード・ホートン撮影

パッスルという下着を用いてスカートの後ろを大きく膨らませた1870年代半ばの典型的なドレス。ドレスのシルエットの変化が著しかった19世紀後半において、1870年代から80年代にかけて流行したのがパッスル・スタイルと呼ばれるこの形だった



## 旅するドレス

ここに一着の稀少なドレスがある。スカートの後ろを大きく膨らませた、1870年代半ばの欧米における流行のスタイルだ。しかし、このドレスが純然たる欧米製に見え難いのは、その独特な生地<sup>せいで</sup>のせいであろう。近づいてみると、菊、牡丹、藤、団扇柄<sup>うあし</sup>が刺繍や染め技法によって散りばめられている。実は、このドレスは当時日本から遠く西欧へ渡ったきものを、ロンドンのターナーという店がドレスに仕立て直したものののだ。折しも西欧では日本の芸術文化に対する愛好熱に火が付き、19世紀末に向けて高揚しようとしていた時だった。きものは人々の日本への興味を刺激する貴重な輸入品だったのだ。つまりこのドレスは形、素材ともに流行の最先端ということになる。「日本」をまとった西欧の女性はさぞや目を引いたことだろう。

きものから姿を変えた一着のドレス。それから100年以上の後、今度は西欧から日本へと渡り、ここ、KCIの収蔵品となった。そして今、このドレスはさらなる旅路に就いている。アメリカ三都市の美術館を巡回する展覧会へ出展するためだ。この展覧会は、日本のきものが今日まで欧米のファッションにいかにか影響をも

(右) 寺島保太良商店の外観。近くには大徳寺や今宮神社、金閣寺といった京都の名所が点在する

(左) 寺島保太良商店、代表取締役の寺島大悟さん。昔ながらの方法で金糸を撚ってみせてくれた  
／筒井直子撮影



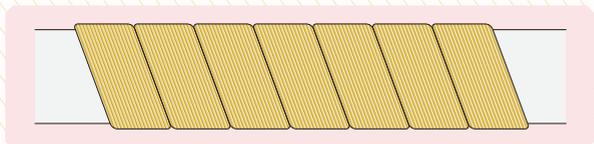
細かく平らな金糸がらせん状に巻かれ、金糸になっている



ニューアーク美術館（ニュージャージー）にて開催された「Kimono Refashioned」展の会場風景

本展は2018年10月から1年をかけてニューアーク美術館、サンフランシスコ・アジア美術館、シンシナティ美術館を巡回している。シンシナティ美術館では「Kimono: Refashioning Contemporary Style」という展名で2019年9月15日まで開催

Kimono Refashioned, Newark Museum, 2018, ©Emily Laverty



丸撚りによる金糸。芯糸に平箔を隙間なく包むように撚っていく

最初に訪れた京都府南部の城陽市にある工場は、金糸の姿からは想像もつかないところだった。「これがこの工程での出来上がりです。」そういつて見せてくれた

## 和紙と漆——金糸の土台となるもの

「ラメ糸」が量産の主流となるなか、多くの金糸製造者が廃業していった。寺島さんは数少ない金糸の担い手だ。「昔ながらの方法で作る最高級の金糸は本当に手間のかかるものなんです。」古くから日本の金糸は金箔を細く裁断して芯糸に巻き付けて作る。その工程は細かく分業されているそうだ。そこで、工程の幾つかを見せてもらったことにした。

## 昔ながらの金糸を求めて

それを知る手がかりとして、京都市北区で金糸の製造・販売をしている寺島保太良商店を訪ねることにした。大徳寺や今宮神社にほど近い同店で、代表取締役の寺島大悟さんが朗らかに出迎えてくれた。「うちは明治30年の創業です。ずっと金糸、銀糸を扱ってきました。きものもそうですけど、日本各地のお祭りの神輿や山車の刺繍幕には今も金糸がたくさん使われていますよ。力士の化粧まわしにも。そういう伝統的な装飾の需要は今もずっとあります。ただ、京都で純金を原料とする金糸を扱う店はもうほんの数軒になってしまいました。」近年、金糸の代わりに、それに似せた「ラメ糸」が量産の主流となるなか、多くの金糸製造者が廃業していった。寺島さんは数少ない金糸の担い手だ。「昔ながらの方法で作る最高級の金糸は本当に手間のかかるものなんです。」古くから日本の金糸は金箔を細く裁断して芯糸に巻き付けて作る。その工程は細かく分業されているそうだ。そこで、工程の幾つかを見せてもらったことにした。

さらに金糸の細部を見てみたい。細く平らな金がクルクルとらせん状になっているのがかろうじて分かる。金属であるにもかかわらず、硬そうには見えない。金糸は自在に曲線を描き、花の形にきつちりと納まっている。金属がしなやかな糸になった秘密は一体どこにあるのだろうか。

## しなやかな金属の糸

この金糸刺繍の一つに近づいてみよう。金糸が束になって生地には貼りついているのが分かるだろうか。これは「駒縫」という技法で、生地に直接刺し通せない太い糸を用いる場合に使う。下絵にそって生地の上にその糸を置き、別の細い糸で綴じ付けていく、江戸時代初期より好まれた方法だ。太さが重視された金糸に適し、とりわけ女性の打掛や小袖の装飾に多用された。



写真①  
金箔を貼るための漆紙を製造する服部商店の服部さん。1階は室(むろ)で2階の床は所々空いている

写真②  
約50年前の機械で125メートルもの紙に均等に漆を塗っていく

写真③  
身体に馴染んだ感覚を頼りに漆を調整する服部さん

写真④  
漆を塗った和紙は表面が接しないように細心の注意を払いながら二人掛かりで室に吊るしていく



左  
1階の室の様子。ツヤッと光る漆の光沢が美しい  
／福嶋英城撮影(P.18～19)



にならないらしい。ようやく125メートル分の作業を終えると、「これを丸一日、室で吊って乾かします。そしてあと二回、同じようにして塗り重ねます。」服部さんが玉のような汗を垂らしながら平然とした表情で語る。金糸の素地にこのような工程が隠れていたとは。驚きを禁じ得ない。「金糸の品質を決める大切な仕事なんですよ。」寺島さんが呟いた言葉に深い敬意がこもっていた。

のは、茶色く長い一枚の紙だったからだ。工場の二階へ行くと、数メートルにわたり床がぼつかりと空いている。下を覗くとそこは広い室(むろ)になっていて、高さに思わず足がすくむ。「ここでは金箔を貼るための和紙に漆を塗っています。金箔は一万分の三ミリですから、糸にするためには土台となる和紙が必要なんですけど、凹凸があつてはいけませんね。だから和紙の表面をツルつとさせて金箔となじませるのには漆が最適なんです。漆は湿度のある環境で乾くので、こういう室が必要なんです。」五年の修行を経たという服部さんが缶に入った漆を丹念に混ぜながら話してくれる。「この漆を幅60センチ、長さ125メートルの長い和紙に均等に薄く塗ります。」聞くと、漆は質感の調整が非常に難しく、塗布が薄すぎると金箔が綺麗にのらず、厚すぎると表面が割れるのだそうだ。さらに漆の状態は湿度度に大きく左右され、それを客観的に測ることは出来ないらしい。全てその日の温湿度を身体で感じ、手の感覚を頼りに漆をどのタイミングと硬さで塗るのかを決めるのだという。「それではこれから塗っていきますね。」空調を切り、全ての窓を閉め、約50年前から動いているという機械にまんべんなく漆を垂らす。するとロール状の和紙が薄茶色に染まってスルスルとはき出されてくる。それを二人掛かりで室のなかに波状に吊っていく。一定の速度で和紙が出てくるため、一時も手を休めることは出来ない。そして、一点でも和紙の表面がどこかに付いてしまうと、その1ロールは使い物

金糸完成までの道のりがこれほど果てしなく遠いことを、私たちはこの時まで全く想像すらしていなかった。  
(次号へつづく)

取材文・筒井直子

寺島保太良商店

〒603-8246 京都市北区紫野西泉堂町65-2  
電話 075-495-7111  
ホームページ <http://www.terayasu.com>

## 展覧会関連イベント

### シンポジウム

「ドレス・コード? —それぞれのファッション学の視点から」

日時 8月31日(土) 午後1時30分より(午後1時開場、午後4時30分終了予定)  
 登壇者 内村理奈氏(日本女子大学家政学部 准教授)  
 平芳裕子氏(神戸大学大学院人間発達環境学研究所 准教授)  
 井上雅人氏(武庫川女子大学生活環境学部 准教授)  
 小形道正(京都服飾文化研究財団 アシスタント・キュレーター)  
 場所 京都国立近代美術館1階講堂  
 参加費 無料(本展観覧券が必要)  
 定員 先着80名(事前申込不要。当日午前11時より1階受付にて整理券を配布)

### 子どものワークショップ

着せかえ紙人形を使って  
 19世紀のファッション・デザイナーになろう!

日時 9月21日(土)、28日(土)、両日ともに午後1時~4時  
 (開催時間中はいつでもお越しください。ただし各日、先着50名まで)  
 参加費 無料、事前申込不要  
 対象 3歳以上(ただし未就学児は保護者同伴のこと)  
 場所 京都国立近代美術館1階ロビー



詳細は展覧会特設サイトをご覧ください。  
<https://www.kci.or.jp/dc>



グッチ 2018年秋冬



コム・デ・ギャルソン・オム・プリユス 2009年秋冬



モスキーノ 2017年春夏 MOSCHINO S.p.A. 寄贈



ヴェトモン 2017年秋冬



ジェフ・クーンズxルイ・ヴィトン 2017年

# 京都服飾文化研究財団(KCI)はこの夏 「ドレス・コード? —着る人たちのゲーム」展を 開催します

京都国立近代美術館 2019年8月9日(金)~10月14日(月・祝)

### 展覧会情報

「ドレス・コード? —着る人たちのゲーム」展  
 2019年8月9日(金)~10月14日(月・祝)  
 京都国立近代美術館(岡崎公園内)

開館時間 午前9時30分~午後5時  
 毎週金曜日、土曜日は午後9時まで開館(入館は開館の30分前まで)

休館日 毎週月曜日 ※ただし8月12日、9月16日・23日、10月14日(すべて月・祝)は開館。翌日火曜日が休館

主催 京都国立近代美術館、公益財団法人京都服飾文化研究財団

後援 京都府、京都市、京都商工会議所、一般社団法人日本アパレル・ファッション産業協会、一般社団法人日本ボディファッション協会

特別協力 株式会社ワコール

協力 KLMオランダ航空、株式会社七彩、日本航空、ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社

助成 オランダ王国大使館

協賛 MHD モエ ヘネシー デイアジオ株式会社

入場料	当日	前売・団体
一般	1,300円	1,100円
大学生	900円	700円
高校生	500円	300円
中学生以下/無料		

※団体は20名以上、消費税込み  
 ※心身に障がいのある方と付添者1名は無料(入館の際に証明できるものをご提示ください。)  
 ※本料金でコレクション展(4階展示室)もご覧になれます。

[展覧会のお問い合わせ]

□京都国立近代美術館 TEL: 075-761-4111

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町

□京都服飾文化研究財団 TEL: 075-321-9221

〒600-8864 京都市下京区七条御所ノ内南町103

本展は熊本市現代美術館(2019年12月8日(日)~2020年2月23日(日))に巡回します。詳細は決まり次第本展特設サイトにてお知らせします。

今日 着ている服、あなたはどうか選びましたか? 制服、スーツ、ジーンズ、Tシャツ、ワンピース、トレンドコート…。その時の気分で選ぶこともあれば、何をするか、誰に会うかで決めることもあるでしょう。コスプレのように自分とは別の「だれか」になろうとすることだってあります。

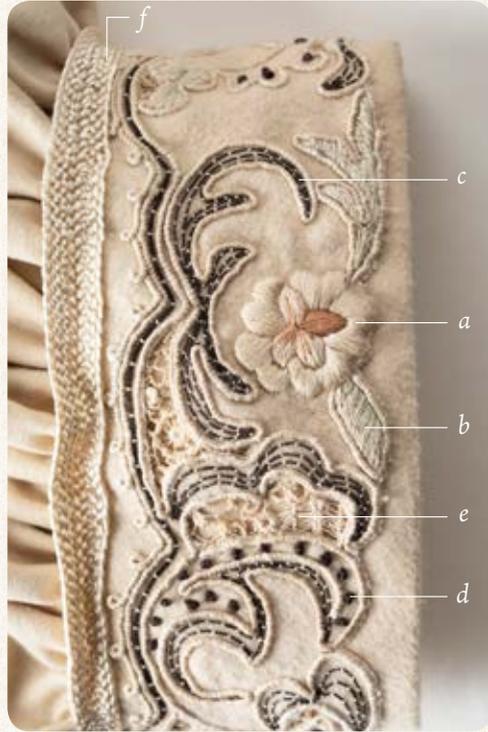
一方で、ファッションは「着る」だけでなく、「視る/視られる」ものです。特定の文化や社会、グループで通用するコードがあり、そこから駆け引きあるいはゲームにも似た自己と他者とのコミュニケーションが生まれています。

インターネットとSNSの普及によって、誰もが自らの装いを自由に発信できるようになった現在、私たちとファッションのかかわり方もまた新しい局面を迎えています。本展では、ファッションやアートのほか、映画やマンガなどに描かれたファッションも視野に入れながら、現代社会における新たな「ドレス・コード」、わたしたちの装いの実践(ゲーム)を見つめ直します。是非お越しください。



© 京都服飾文化研究財団

KCIで製作した左カフス



オリジナルの右カフス



- a. 花／三重のサテン・ステッチ。1層目と3層目は同方向、2層目はそれらと直角方向に刺すことでぷっくりとした厚みが出る
- b. 葉／ロング・アンド・ショート・ステッチ
- c. 茶とベージュのコードをコーチング・ステッチでとめる
- d. 茶のナット・ステッチ
- e. 生地を切り抜き、レースを裏からあてる
- f. ブレードを付ける

### カフスの製作補充手順

1. 右カフスのパターンを取り、刺繍図案を製作する。
2. 右カフスの刺繍図案を左右対称に写し、刺繍する。刺繍糸には染色した綿刺繍糸を使用。
3. レースをはめ込む箇所の生地をあらかじめ切り抜いておき、オリジナルに似たレースを裏側から当てる。レースが不足しているところは、レースと同色の糸を渡し、かがって補う。
4. 刺繍した生地の下端を刺繍に沿ってカットし、土台の生地(染色したネル)にアップリケする。
5. ミシンステッチで留められた2枚のバイアス地の芯を入れる。袖に縫い留め裏地を付ける。
6. オリジナルに似たブレードをカフスの上端に付けて完成。

## 今日の補修室

TODAY'S RESTORATION ROOM

第13回

### 欠損部の製作補充①

今号より、  
欠損部の製作補充について  
ご紹介します。



欠損部を製作補充した収蔵品

レドファン  
コート 1902年頃  
京都服飾文化研究財団所蔵 ©KCI

KCIでは、補修・修復として欠損部の製作補充を行うことがあります。今号から、これまでKCIで行った欠損部の補充をご紹介します。

欠損部の製作補充を行うには二つ条件があります。一つが、欠損によって衣服の機能やデザインが著しく損われていると判断した場合、もう一つが、現存している部分をもとに欠損前の状態を推し量ることができる場合です。

今回は、1902年頃のレドファン(テイラード・スーツで名を馳せたイギリスのブランド)のコートのカフス(袖口)を欠損補充した事例を紹介します。KCIでこのコートを収蔵した当初、見事な装飾が施された右カフスは残っていましたが、左カフスは取り外され欠損していたために外見を損なっていました。現存する右カフスをもとに左カフスの製作補充が可能と判断し、左カフスが製作されることになりました。

欠損部を製作するため、まずは残っている右カフスがどのような素材でどのように縫われているか、内部構造を詳しく調べました。調査により右カフスは、刺繍した生地を土台の生地に重ねアップリケした二重構造と判明しました。適した素材を選定したのち、左カフスの製作に取りかかりました。

(谷智恵美)

お知らせ

## KCI収蔵品のなかから、 19世紀の紙製着せかえ人形を復刻します！

これは1839年-41年のファッション誌に付録として付いていた紙製着せかえ人形です。子どもの玩具ではなく、大人の女性向けに作られたものです。既製服がほとんどなかったこの時代、女性達はこれをもとにドレスをオーダーしたり、コーディネートの参考にしていました。

これまで、この着せかえ人形をご覧になった方々から「可愛いから作って欲しい！」というお声を多数いただいていた。そこでこのたび皆様の熱いご要望にお応えし、「ドレス・コード？—着る人たちのゲーム」展の関連グッズとして復刻することになりました。

会期中、美術館のミュージアム・ショップで販売しますので、ぜひお手にとってみてください。また、会期中にこの着せかえ人形を使ったワークショップを開催します。ぜひご参加ください。

※「ドレス・コード？—着る人たちのゲーム」展の詳細は20～21ページをご覧ください。



## 服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第13号  
2019年7月22日発行（年3回発行）

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI)  
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103

株式会社ワコール京都ビル内

電話：075-321-9221

ウェブサイト：<https://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城、松坂雅子（京都服飾文化研究財団）

デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子（Neki inc.）

写真：成田舞（Neki inc.）

筒井直子、福嶋英城、伊藤ゆち子（京都服飾文化研究財団）

## 編集後記

いま東京で開催中の「マリア・フォルチュニー織りなすデザイナー展」では、20世紀初頭から活動を始めた芸術家、フォルチュニーの多岐にわたる創作活動が紹介され、話題を集めています。なかでも彼の真骨頂ともいえる衣装作品は充実した展示となっています。KCIはこの展覧会にフォルチュニーの衣装や資料作品など計8点を貸出しました。代表作のブリーツ・ドレス、「デルフォス」は本展のキャッチコピーにもある通り、「100年たっても、新しい」。彼の作品には「いま着てみたい」と思わせる色あせない美しさがあります。この機会にぜひご覧ください。本展は東京・丸の内三差一号館美術館にて10月6日(日)まで開催。詳しくは美術館ホームページ<https://mimt.jp/>をご覧ください。